52年の積み重ねが生み出す匠の技術と信頼

宮大工　森下孝明（67歳）

最初は褒章のすごさがわからなかった

平成26年11月、秋の褒章受章者が発表されました。そのなかの「業務に精励し衆民の模範たるべき者」に授与される『黄綬褒章』を宮大工・森下孝明さんが受章しました。

森下さんは、昭和37年に地元祖式町の石原建築に内弟子として入り、昭和59年に独立し、平成5年に有限会社森下コンストラクターを創立。これまで様々な技術を会得し、日本各地の神社仏閣の建築や補修に全霊を注いでいます。今回、栄えある黄綬褒章の受章に対して本人は、「どういう褒章なのか知らなかったから、まわりからすごいことだと言われてもすごさを実感できなかった」とのこと。森下さんにとっては当然のことを日々続けてきただけなので、突然のことに喜びより驚きが勝っていたようです。

とにかく人の倍は努力をしようと思っていた

大工になるために石原建築に内弟子として入ったのが15歳。内弟子として師匠の家族と一緒に暮らしながら働き、必要な技術を教えてもらっていました。

「私が最後の内弟子だったけど、本当に大変で、生活のすべてを手伝わないといけなかった。朝4時に起きて草刈、牛の世話、庭掃除、6時の朝食後には一番に現場に行って仕事の準備をする。内弟子になってからの3年間はほとんど雑用で、7年目からようやく一人役として扱ってもらえた」

内弟子としての生活は大変だったと語る森下さんでしたが、後々、雑用の大切さを思い直したそうです。

◀木材について説明する森下さん。材料の目利きは自他ともに認める実力。見ただけで何に使えるか一発でわかるそう。

「雑用はあらゆる事の段取りがわかる。大工仕事だけじゃなく、基礎の穴掘りやコンクリートの配分も全部覚えることができた。他にも山で木を切って製材する技術、それを通して木の癖を覚えて、木を見る力が養われた。今でも木を見ればどんな材料にすればいいかすぐ分かる」

様々なことを自分の糧として仕事に打ち込んできたからこそ、今の森下さんがあると感じさせてくれる話です。それだけでなく、大

森下孝明さん

宮大工

昭和37年に石原建築に内弟子として入社。昭和59年に独立し、森下コンストラクターを創立。平成５年に法人化、有限会社森下コンストラクターとし、代表取締役に就く。現在に至るまで、一級とび技能士をはじめ様々な資格を取得。卓越した技術により平成22年に現代の名工の表彰を受け、平成26年11月に黄綬褒章を受章。

工仕事もさせてもらえない雑用時代でも積極的に学ぶことを怠りませんでした。

「職人さんが帰ったあとに、その人がした仕事を見て勉強をしていた。作ったものをくまなく見たり、実際に道具をあてて動きをまねしてみたりした。とにかく人の倍はやろうと思って毎日過ごしていた。しばらくして親父（師匠）から、手ごろな家があるからと初めて任せてもらった物件を、何も聞かずに仕上げたことがあった。親父は何も口出ししなかったが、きっとわからないところを聞いてくると考えていたと思う。だから仕上げたときは、どこで仕事を覚えたんだと驚かれた」

▶大田市の建築関係の事業所が組織する『石州素舞流』の会長でもあります。モデルハウス見学や彼岸市でイベントなどを開催しています。

次の世代に繋いで ようやく一人前に

これまで努力と研鑽（けんさん）を重ねてきた森下さんですが、まだ自分は半人前だと言います。

「今６人の弟子がいるが、人を育てるというのは物事を教えてわかってもらわないといけないのでとても難しい。自分が覚えるのとはわけが違う。私のこれからの目標はこの若い世代を育てていくこと。私が身に付けた技術を彼らが習得して、社会的に自立して、結婚して、技術的にも社会的にも認められたときが、やっと自分を一人前にしてもらえる時だと思っている。自分のことだけでは半人前、次の世代に繋いでその子がきっちりやってくれたのを見てやっと一人前」

全国的にも宮大工の継承者はそう多くないそうです。技術の伝承、弟子の将来、それらを見届けること、一人前と認めてもらうために森下さんはまだまだ人一倍の努力をつづけます。

▲「大田市ものづくり名人」として登録いただいており、子どもたちに技術やものづくりの楽しさを伝えてもらっています。

石州素舞流（せきしゅうすまいる）とは？

平成15年に地元の建築関係事業者により発足した会で、現在15社の会員とアドバイザーで構成されています。石州瓦や地元の木材などの地元の自然素材と匠の技を用い、自然の優しさの中に伝統とデザイン性を兼ね備えた石州素舞流ならではの住宅を提案しています。

有限会社
森下コンストラクター
島根県大田市祖式町1068－1
TEL 0854－85－2338